

ルチアめる

2023年新春挨拶

特別インタビュー 久留米市子ども未来部 幼児教育研究所



児童思春期病棟の柳瀬美穂子看護師長。子どもたちと元気いっぱい活動を楽しんでいます。

- FOCUS / 子どもに合わせた環境づくり
- St. Lucia's Report 「聖ルチア病院秋場所」
- 聖ルチア病院のプロフェッショナル / 病棟看護師

卯年は 「飛躍」「向上」

目指せ！

精神医療

地域包括ケア

システム構築！



「卯年」は、うさぎが跳ね上がる様子から、希望に溢れ、好転する「飛躍」「向上」の年とされています。さらに「癸(みずのと)」と組み合わさる2023年は、これまでの努力が花開き実り始める、とても縁起の良い年です。

社会医療法人聖ルチア会 聖ルチア病院 理事長・院長 大治 太郎

あけましておめでとうございます。旧年中にお世話になりました皆様方に、改めて御礼申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

当院はおかげさまで昨年「70周年」を迎えることができました。振り返ってみますと、当院は各々の時代に合わせた精神科医療を提供してきました。近年は社会情勢や情報化社会の急激な変化により、精神科医療への期待はますます高まっています。

卯年である本年は、皆様のご期待に応えるべく、さらにホップ!ステップ!ジャンプ!!の飛躍の年にしていきます。

更なる専門性向上を求めた 病棟機能強化

■ 昨年は、聖ルチア病院にとって
どのような年でしたか。

この3年間は、地域社会で特にニーズの高い「うつ病」「認知症」「児童思春期疾患」「依存症」「統合失調症」の5つの疾患について、専門性の高い治療

の確立を目指して取り組んでいます。具体的には、多職種で構成されたチームが中心となって、疾患に特化した専門治療やリハビリ、プログラムを取り入れるなど、専門性の向上に努めてきました。また重度や難治性の疾患など、これまで治療効果が得にくかった症例にも対応できる体制を整えて、積極的に取り組んでいます。これまでの成果も少しずつ出ていると感じていますので、今後はさらに期待しており

ます。昨年秋からは、これらの専門性を発揮できるように病棟内の改築工事を行いました。特に児童思春期病棟は、子供やご家族が安心できる安全な治療環境を完備し、依存症の入院治療では専用エリアを設けるなど、高い専門性が発揮できる環境を整えました。このように昨年は、より疾患や年代に合わせた治療を提供するために、病棟機能の強化を図った1年でした。

患者様が地域で安心して暮らせる環境づくり

■ 本年は、どのような年にしたいですか。

今年で4年目になる疾患別の専門治療チームの取り組みにより、これまで治療効果が得にくかった患者様の社会復帰や退院して自宅で外来診療が継続できるケースが増えてきました。そこで次のステップとして、昨年より退院後の「社会復帰支援」と「在宅支援」の強化に取り組んでいます。「デイケア」「重度認知症患者デイケア」「グループホーム」「訪問看護」の4つの部門で、医療機関だからこそできるリハビリや生活支援、積極的な就労支援を行っていきたいと考えています。そのために今年はいケア、重度認知症患者デイケア施設の建て替え工事に取り組む予定です。児童・成人・高齢者などの年齢層や疾患に合わせたより個別性の高い支援を行い、精神疾患をもつ患者様が社会に復帰するため、地域で暮らし続けるための仕組みの構築に取り組んでまいります。

一般病院との連携を強化

■ 今後の関係機関との連携について教えてください。

これまでも医療、介護福祉、障害福祉の各事業所、行政機関、教育関係機関など、患者様やご家族に関わる様々な関係機関の皆様との連携を行って

まいりました。近年は子どもの受診が増えたことで、学校やスクールソーシャルワーカーとの関わりも急激に増えました。また昨年からは、一般病院とも連携を大切にしています。身体と精神はお互い相関しており、身体疾患から心が弱まって、精神疾患を患うことがあります。例えば、がんと診断された方がショックや不安で、うつのような状態になることがあります。当院においても身体疾患を合併する精神疾患の治療環境を整えております。今後はさらに一般病院と協力し合うことで、お互いの強みを生かして、補完的な関係性を築いていきたいと考えております。

このように関係機関の皆様方と当院が連携して、地域の皆様が健康で安心して生活できる環境、いわゆる「精神医療地域包括ケアシステム」の構築を目指しています。

本年もこれまで以上に各機関の皆様との連携を強化し、地域の健康と幸福の増進に貢献できるように取り組んでまいります。今後ともよろしくお願い致します。



“それぞれの立場から地域の子どもの育ちを支える”



幼児教育研究所 指導主事
松尾 訓子さん

幼児教育研究所
臨床心理士・公認心理師
鬼木 美穂さん

聖ルチア病院 児童思春期病棟専従 臨床心理士・公認心理師
武下 和史 がインタビューしました。
子どもが生活のルールを学ぶための環境の工夫について
教えていただきました

聖ルチア病院には「児童思春期病棟」という、6～19歳の患者様の治療を行う専門病棟があります。

今回は、臨床心理士・公認心理師の武下和史が、久留米市で発達支援事業を行う「幼児教育研究所」（久留米市荘島町）の松尾訓子さん、鬼木美穂さんにインタビューしました。



武下 「幼児教育研究所」とは、どんなことをする施設ですか？

松尾 幼児教育研究所は、発達支援事業のほか、乳幼児保育教育の調査・研究事業、幼稚園・保育園・小学校との連携推進、ペアレントトレーニングや子育て講演会などを通じた保護者支援や情報

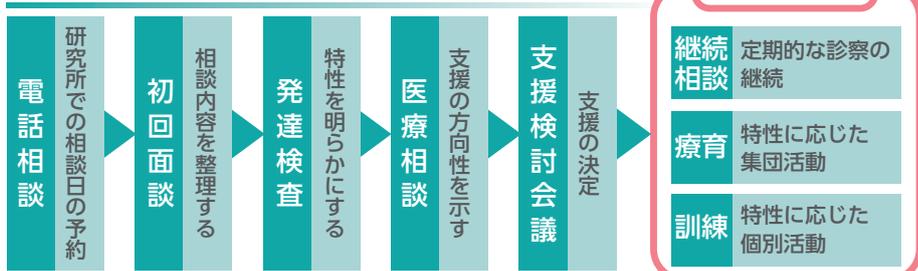
提供を行い、地域の乳幼児保育教育全体に関わっています。

特に発達支援事業では、0～6歳の未就学児を対象に、発達が気になる子への相談・療育・訓練を行っており、2021年度末の登録者数は523名です。保護者の方や幼稚園・保育園の気付きからご相談いただいて、支援につながるケースが多いです。医師、臨床心理士や保育士など様々な専門職が在籍しています。初回面談ののち、発達検査や言語聴覚士による検査、医師の診察を経て、療育

幼児教育研究所とは

久留米市子ども未来部に所属し、幼児等の保育等に関する調査・研究や幼保小の連携推進、関係者の研修を実施。特に、幼児等の発達支援に関する事業（相談・訓練・療育等）を行っています。「幼研（ようけん）」と呼ばれ、親しまれています。

発達相談の流れ



を開始します。施設内には診療所があり、定期的に医師の診察を行いながら、継続的に発達の状況を診ています。

鬼木 発達支援事業の中心となる「療育」では、「子どもたちが園や家庭での生活に生かしていくこと(汎化)」を目的として、学年や子どもの特性に応じて学級を分け、通所してもらいます。各学級では、発達段階や発達の特性に応じた「遊び」を通して、対人関係や生活スキルの発達、感情や行動のコントロールを促します。

幼児教育研究所では、子どもたちが「いつ」「どこで」「何を」「どのように」行動すればよいかが目で見分けるよう、環境づくりを工夫しています。例えば、自分の立つ場所がわかるよう床に足型のシールを置いたり、ルールが分かるように、イラストやロールプレイで示したりしています。環境が整うことで安心し、自発的に行動しやすくなります。保護者にも療育に参加してもらうことで、子どもの特性に沿った関わり方や声かけ等を学んでいただいています。

武下 環境づくりのお話、とても参考になります。保護者も含めた支援って大事ですよね。当院でも、家族ごと支えることを大切にしています。児童思春期親子支援プログラムを実施し、子どもを対象にしたソーシャルスキルトレーニング(SST)と保護者を対象としたペアレントトレーニングを同時に行っています。また、育児の不安や悩みを抱える保護者が自由にお話しいただく子育てサロンも行っています。

今、特に力を入れて取り組んでいることはありますか？



松尾 幼稚園や保育園には、発達に課題のあるお子さんをどのように支援したらいいか悩んでいらっしゃる先生も多く、幼児教育研究所との連携が求められています。加配保育士が配置されている園では、発達フォロー相談にて

園の先生にも来所していただき(園の様子を確認しながら)子どもの特性に沿った助言を行います。また巡回相談では支援の助言をするだけでなく、子どもの良い面や成長した面についても伝えていきます。支援は、幼児教育研究所



所の中だけでなく、普段の生活に生かすことが大切ですので、園の中で必ず情報共有していただいています。反対に、園の先生にも当施設への見学にお越しいただき、実際の療育等を見ていただいています。子どもたちが落ち着いて活動している様子に驚かれることもありますね。

鬼木 幼児教育研究所は、未就学児が対象ですので、卒級するときには、一人一人の特徴や対応方法をまとめたサポートブック「にじいろのーと」を保護者に作成していただき、学校にお渡しできるようにしています。子どもや保護者が地域の中で安心して暮らしていけるように、他の医療機関や福祉サービス、子育て支援機関との連携も進めていきたいと思えます。

武下 当院の患者様は小学生以上が多いのですが、その中には、幼少期に幼児教育研究所に通っていた子もおり、療育がどういったものか理解されているので、こちらも安心感があります。地域の子どもや保護者をそれぞれの立場から支えていきましょう。



施設情報

久留米市子ども未来部幼児教育研究所

お気軽にご相談ください

〒830-0042 久留米市荘島町 11-1

総合幼児センター

TEL : 0942-35-3812 FAX : 0942-35-3886

総合幼児センターの2階には、久留米市幼児教育研究所、久留米市江南子育て支援センターが入っています。幼児教育研究所は大川市、うきは市、大木町、大刀洗町にお住まいの方もご利用いただくことができます。

子どもに合わせた環境づくり

今最も注目の情報にフォーカス!

FOCUS

苦手なことが多い子どもにとっては、新学期などで環境が変化することはストレスとなります。少しずつ出来ることが増えるよう、その子に合ったサポートが必要です。当院の児童思春期病棟で行っている取り組みをヒントに環境の工夫や子どもとの関わり方についてお伝えします。



作業療法士
川勝 陽平

作業療法士
川口 洋子

どんなことで困っているの?

「勉強が苦手」「掃除ができない」など、苦手なことがある場合、どんな場面で困っているのか、どんな理由があって困っているのか、その子自身の困っている気持ちや、まわりの環境に目を向けてみることも大切です。

困っている理由に対して、かかわり方を工夫したり、環境を変えてみることで、その子のできることで、少しずつ増えていくようサポートしていきましょう。

困っている理由には・・・

- 見通しを立てることが苦手
- 苦手な感覚がある（音やにおい、触覚など）
- うまく体を使えていない（不器用さがある）
などが考えられます。

学校での工夫と関わり方のポイント

“授業に集中することが難しい(ぼんやりしている、そわそわしている)” ときの工夫の一例をご紹介します

■ 姿勢を整える

椅子や机の高さが合っていないと、不安定な姿勢になっている可能性があります。床に足が付き、体が安定する姿勢を保てるようにしましょう。

工夫例

- 座面が安定する硬さのクッションや、滑り止めがついたシートをしく

■ 体を動かす

授業前や授業中に適度に体を動かすことで、気持ちを切り替えたり、授業に集中できる体勢をつくることができます。

工夫例

- 休み時間に適度に身体を動かす運動をする
- 授業で使う道具を運んだり、準備を一緒にする
- 授業中、プリントを配る役割や黒板を消す役割をしてもらう

■ 情報量の調整

目につくものが多かったり、様々な音が気になると、黒板や先生の話集中できないこともあります。

工夫例

- 黒板の周りには掲示物ははらず、教室の後方に掲示する
- 机には必要な物のみを置き、それ以外の物は引き出しに片付けておく
- 板書のポイントがわかりやすいように、色を変えたり大きさを工夫する
- 伝える時は具体的な言い方で伝える

「ちゃんと見ましょう。」

→「背筋を伸ばして黒板の赤い字の部分を見ましょう。」

「字は丁寧に書きましょう。」

→「ノートのマスからはみ出さないように書きましょう。」

■ 見通しを示す

次に何をしたら良いかの予測がついていなかったり、いつまで続けられれば良いかわからず不安になっていることもあります。

工夫例

- 大まかな授業の流れについてはじめに説明し、スケジュールを掲示しておく
- スケジュールは、簡条書きなどで簡潔にし、絵や写真なども使う
- 作業の終わりと次の作業を具体的に伝える

「10時20分になったら終わりです。終わったら〇〇をしましょう」など



津福東自治会 会長 一木 正男 さん
副会長 村上 正成 さん

久留米市内には約660の自治会があり、地域をより良くするために、お互いに助け合いながら、暮らしやすい環境づくりに取り組んでいます。

聖ルチア病院のある「津福東自治会」は約430世帯が暮らし、それを50区に分けて活動しています。聖ルチア病院は単独でその中の一つの区を担当しています。

○ 一木正男さん・村上正成さん コメント

自治会では、防犯灯の設置や管理、地域の清掃、防犯・防災活動、地域のお祭りなど、生活に密着したまちづくり活動を住民同士で協力して行っています。特に将棋やカラオケなどのサークルを住民が主体となって、活発に行っています。

聖ルチア病院さんにも同じ地域として、協力して頂いています。また、昔から地域の中でもお世話になっている方が多いと思いますし、身近な医療機関というイメージです。以前、健康教室を企画していて、コロナ禍によって、まだ実施できていない現状ですが、今後も地域の方の健康づくりのサポートを願っています。良い関係を続けていきたいですね。

津福東自治会

住民同士の協力の元、生活に密着したまちづくり活動を行っています。津福東自治会では、サークル活動に参加したい方や講師になりたい方を募集しています。



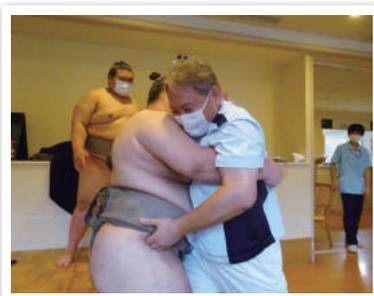
団体情報

津福東自治会
〒830-0047
福岡県久留米市津福本町938-14
TEL:0942-38-9580

St.Lucia's REPORT

『聖ルチア病院秋場所』

～力士との交流会～



続いている恒例行事で、患者様はもちろん、職員も楽しみにしている行事の一つです。

今回ご来院いただいたのは、三段目・優力勝さんと同・新隆山さん。患者様も職員も普段は間近で見ることのない力士の大きさや迫力に大変驚き、興奮しました。子どもたち12人対力士2人の綱引きでは、力強さに圧倒され相手にもなりませんでしたが、子どもたちの大好きなドッジボールでは、持ち前のスピードで逆に力士の二

人を驚かせました。お年寄りには大相撲ファンも多く大人気で、力士を見ると大変喜ばれ、たくさん笑顔があふれました。子どもからお年寄りまで、お二人の力士のおかげで大変楽しく充実した時間を過ごすことができました。

力士からは、「病院が開放的で明るく温かい雰囲気だと感じました。患者様にも喜んでもらって励みになりました。機会があれば、ぜひまた遊びに来たいです。」と嬉しいお言葉もいただきました。

今後も患者様に元気になっていただくために、こ



のような機会を続けていきたいと思っています。常盤山部屋のお二方、ありがとうございました。

病棟看護師は入院患者様の看護をします。精神疾患で入院になる方は精神的に不安定な方が多いので、安心して治療と療養生活を始められるように、まずは信頼関係を築くことを大切にしています。笑顔で挨拶をして、心で接するコミュニケーションを病棟看護師全体で心がけています。

入院患者様には多くの職種が関わり、その方に合った的確な治療を追求しますが、看護師は多職種の中でも夜間や早朝など患者様と関わる時間が多くあります。様子をよく確認して、必要な情報を多職種に共有するという、重要な役割も果たします。

もちろん「5つの疾患別専門治療チーム」にも所属していて、それぞれの疾患に関する看護の専門性の追求にも



▲患者様と信頼関係を築いた上で、細かく様子を確認する

力をいれています。rTMS(反復経頭蓋磁気刺激)療法やクロザピン(治療抵抗性統合失調症治療薬)など、当院が注力する専門治療に関する資格取得も、積極的に行っています。



▲患者様の様子をチームの多職種で共有し治療方針に反映

▼急性期病棟は救急車対応も重要な仕事のひとつ



連携先の皆さまへのメッセージ

精神科病院の入院病棟はイメージしにくいかと思いますが、当院は明るく開放的で、心が休まる良い療養環境です。患者様が安心して療養を継続できるよう支援させていただきます。お困りの際は、ぜひお気軽に当院までご相談ください。

精神科急性期病棟看護師長 尾崎 貴裕



《対象疾患例》

- 統合失調症
- 気分障害
(うつ病)
- 認知症
関連疾患
- 児童思春期
発達障害
- 依存症
(アルコール・薬物)
- 周産期の
メンタルヘルス
- てんかん
- 摂食障害

《診療時間》

	月	火	水	木	金	土	日・祝
9:00~12:30 (受付時間 8:30~12:00)	○	○ rTMS 外来	○	○ rTMS 外来	○	○	×
14:00~17:00 (受付時間 13:00~16:00)	○	○	○	×	○	×	×

受診相談 「患者様のご紹介」「初めての受診」

受診相談窓口 **地域医療連携室**
受付時間 **月~土曜日 9時~16時**

緊急時は夜間、日祝日も対応します。
まずはご連絡ください。



社会医療法人 聖ルチア会
聖ルチア病院
St. Lucia's Hospital

〒830-0047 福岡県久留米市津福本町1012
TEL0942-33-1581 (代表)
FAX 0942-33-1586

関連施設

- ・精神科デイケア、デイナイトケア、ショートケア
- ・重度認知症患者デイケア すずらん
- ・訪問看護ステーション クローバー
- ・訪問看護ステーション クローバー おおき
- ・グループホーム ルピナス

